

英米文化の背景

「英米人の迷信・俗信」考(11) III 恋と結婚

—その6 花嫁の敷居越え・新婚生活・子宝の幸福・夫婦間の主導権・結婚記念日

藤高 邦宏

倉敷芸術科学大学国際教養学部

(2002年9月30日 受理)

はじめに

新婚夫妻が新居（新たな生活を始める家）に入る際、花嫁は花婿に抱きかかえられて敷居を越えなければならないとされ、¹⁾この習慣は古来今なおしばしば見られるものである。この花嫁の敷居越えの起源や理由は一体何であろうか。また新夫妻が子宝に恵まれる策や、新婚生活の中での夫婦間の主導権の獲得策はどのようなものであるのか、さらに結婚記念日についても考えてみる等を含めて、今号では、これらの諸習慣とそれに纏わる多様な俗信について、文芸用例をも加味しながら考察を試みる。

1 新居入りと新婚生活の始まり

1) 花嫁の敷居越え

一般に花嫁花婿は、挙式前に彼らの新婚生活のスタートとなる新たな住居を決めているものである。新居を親元に定めるか、あるいは独立してアパート、マンション等に定めるかさまざまであろうが、アメリカ合衆国では特別な事情でもない限り、親とは別居するのがごく一般的である。

新婚夫妻がハネムーンに出ている間に、その留守の間に彼らの家族や友人たちが気を利かせて、新居に家具類その他を運び込み、彼らが帰ってきたとき即新生活が始められるようにしておいてくれることも多いようである。また場合によっては、新婚夫妻がハネムーンに出かけない場合もあるであろう。いずれにせよ、新婚夫妻がめでたく新居に入るときには、次のような伝統的慣習がある。

☆「新婚夫妻が新居に入る際には、花嫁は玄関の敷居（しばしば入り口の階段をも含めて）を花婿に抱きかかえられて越えるべき」とされる。この習慣に関して、Sir Walter Scott, *Guy Mannering* (1871) に次の記述が見られる。

The threshold of a habitation was in some sort a sacred limit, and the subject of much superstition. A bride, even to this day, is always *lifted* over it, a rule derived apparently from the Romans.²⁾

（住居の敷居は、ある程度まで聖なる境界で、多くの迷信を生むものであった。今日で

さえ花嫁は、常にその上を持ち上げて越えさせられる。これは明らかにローマ人から伝わった風習である。)

この風習についてPickeringは、「この行為は、ローマ時代には、処女にふさわしくためらいがちに身を捧げる花嫁が、特に明示はできないが何となく新婚家庭での幸福な夫婦の運を守ると考えられていたことを示すものであった。しかしその後、花嫁を抱きかかえて敷居を越えるのは、もっと一般的な意味での『縁起のよい』行為となった」³⁾と述べている。

同所でPickeringも記述しているが、この風習の起源と理由については諸説あるようである。そのうち多くの注釈者が述べるのは、原始時代から12世紀末頃まで見られたという略奪結婚(marriage by capture)⁴⁾の名残り説である。つまり、かつて男たちは妻を求めて出歩き、その意志に反する女性たちをさらい強奪して連れ帰ったとき、その叫び暴れる女性たちを花嫁として家に入れる際には、抱きかかえて敷居を越えるのが良策であった、という説である。

一方、家の出入り口である敷居については、古来、そこは非常にパワーのある場所であり、その外側や下には悪霊や魔物がいっぱい巣食っており、極めて危険な場所であるという考えがある。⁵⁾花嫁がそこを通る際には、そうした悪霊や魔物の影響を受けて家の中に災厄を持ち込むことがないように、花婿が花嫁を抱きかかえて敷居を越えねばならない、という考え方があつた。これは花婿がか弱い花嫁を守るという、いわば一種の騎士道精神の現れであり、Tad Tulejaは「略奪というシナリオの微妙な変形」⁶⁾と説明している。

Tulejaは、これらの2つの考え方は、共通して「花嫁が弱いもの」として見られるという点で同類と見ている。Tulejaの指摘する説は、花嫁は弱いものではなく、逆に「強くパワーに溢れ、危険なもの」としてみる考え方に基づいている。このような花嫁が、家の中で極めてパワーがあるとされる出入り口の敷居を越える際には、危険防止のために花婿が花嫁を抱きかかえる必要があつたと考える。TulejaはArnold Van Gennepの説いた「境目」に纏わる危険をかわすように考案された通過儀礼の生々しい名残り説を支持している。⁷⁾

この考え方にはなるほどと思われる節がある。実はこれと同様のことが他にも見られるからである。それは結婚式当日、花婿は祭壇の前で花嫁に会うまでは花嫁の姿を見てはならないとされる習慣に対する理由に見られる。その理由とは、花嫁は新しい仕来たりへの編入期にあり混乱と危険に満ちているため、挙式直前には隔離しておく必要がある、というものである[拙稿(8)Ⅲ— 2(2)「花嫁の心得」で既述]。

結局、この習慣の起源と理由については上記の諸説がみられるが、恐らくはこれらの諸説が重なり合っているとみるのが妥当ではないかと思われる。上述の略奪結婚の名残り説は、根底的な起源として見なせるかもしれない。その理由は、古代民族の一つの結婚風習が後代の結婚の風習として残ったとみても決しておかしくはないからである。さらに、花嫁は子孫繁栄に貢献するという点では、社会的に大いに価値ある存在であり、また個人的には、花嫁は我が家を護ってくれる極めて貴重な存在でもあることから、その大切な花嫁を家に運び込む際に、その

足を土に汚しては花嫁の大切な徳性を汚すことになり罰当たりなことだ、と考えられたことも推測されよう。また一方、家の出入り口である敷居はパワー溢れる場所であるという考えもある。上述の「その足を土に汚してはならない」の考えや、「敷居は悪霊や魔物の災いを受ける恐れのある場所である」という考えや、さらに古来、「敷居でつまづくのは危険の前兆である」⁸⁾という考え等が幾重にも重ね合わされた結果、「花嫁は花婿に抱きかかえられて新居の敷居を越えなければならない」に至った、と考えることも可能ではないかと思われる。

因みに、花嫁の敷居越えという習慣に関して、T. F. T. Dyer は *Folklore of Shakespeare* の中で、Shakespeare が *Coriolanus* (1607-08) でこの俗信に関してうっかり誤りを犯したとする次の箇所を指摘している。⁹⁾

I lov'd the maid I married; never man
Sigh'd truer breath; but that I see thee here,
Thou noble thing, more dances my rapt heart
Than when I first my wedded mistress saw
Bestride my threshold.¹⁰⁾

(おれは娶った妻を愛した。おれ以上に真実のため息をついたものは決してなかった。だが、ここで君に会えたことは、高貴なる君よ！ 妻が我が家の敷居を跨ぐのを初めて見たときよりも、もっと私の胸を躍らせるのだ。)

確かにシェイクスピアは Aufidius に、「花嫁が我が家に嫁いできたとき敷居を跨ぐのを見た」と語らせている。俗世間の習慣に格別の知識とこだわりを持っていたと考えられるシェイクスピアが、どうしてこのような記述をしたのであろうか。Dyer の言うように、「シェイクスピアはうっかり誤りを犯した」のかもしれない。それにしても、作品の内容上の点などで作者に何らかの意図があったため、とも考えにくいようである。このことについては、シェイクスピアの誤りと推測する以外は考えられないかもしれない。

2) 新居入りと新婚生活の幸福

新婚夫妻が新居に入る際には、それに関して次のような伝承がある。

☆「新婚夫妻が新居に入るときは、幸運を願って必ず玄関を通るべき」とされる。

☆「花嫁が新居で幸せに暮らすためには、新居に入る前にほうきの上を飛び越えねばならない。

そのことは厄病神の魔力をかわすことにもなる。」Leslie Jones は、ほうきを飛び越える行為は、西アフリカの結婚習慣の特徴であり、従ってその考えは恐らく、かつてアメリカ合衆国に連れてこられた奴隷が自分たちで持ち込んだものであろう。しかしながら、ほうきに関する事柄はヨーロッパの多くの結婚習慣の一つの特徴でもある。つまり、ほうきは明らかに主婦たる者が果たすべき事柄を象徴するものである、と説明している。¹¹⁾

- ☆「花嫁が新居に最初に運び込むべき物は、新しいほうき一丁、塩一箱、それにニンニク一球あるいは聖書である。」
- ☆「新居に入る時には、肉を少々、それに小麦粉を少々持ち込むがよい。そうしておけば、あなたは決して欠乏知らずでいられる。」
- ☆「新居にはいるときには、メンドリを一羽持ち込み、縁起よさのためにクワックワツと鳴かせるがよい。」これは、田園地方では時として今日でも言われるようである。
- ☆「花婿付添人であるベストマンが、新婚夫妻の家に入るとき、後ろ歩きで入るならば大変縁起がよいことだ」と言われる。
- またさらに、新婚生活を始めるにあたって、古来、多様なことが伝えられている。
- ☆「家事を始めるに当たって、古いコーヒーポットを使うと縁起がよい。」
- ☆「新婚夫婦がともに食べる最初の食事を、花嫁が調理するのは縁起がよいことである。特にパンを焼くのがよいとされる。ただし、夫婦になっての最初の朝にベーコンを食するのは不吉である。」¹²⁾
- ☆「愛情を促進するためには、新婚夫婦はともにマルメロ (quince) を食べるとよい。」
- ☆「幸福な結婚のためには、結婚後七日間は家の床を掃除しないがよい」¹³⁾とされる。

2 子宝の幸福

1) 男児か女児か

- 生まれてくる子が男児か女児かに関しては、占いめいた俗信がある。
- ☆「結婚披露宴の時に、幼い男児が花嫁の膝に座ると最初の子供は男の子が生まれる。」
- ☆「花婿の母親が、花婿のベルトにワイン瓶のコルク栓を縫い込んでおくと、最初の子は男の子となる。」¹⁴⁾
- ☆「初夜のベッドの下に斧を置いておくと、最初の子供は男児になる。」
- ☆「初夜のベッドに花嫁がヴェールを置いたままにしておくと、彼女の最初の子供は女児となる。また、もしベッドにスリッパを置いたままにしておけば、生まれてくる子供は男児よりも女児が多くなる。」
- ☆「生まれてくる子が男女いずれになるかは、結婚式が終わって立ち去るときに出会う最初の子供の性がそれを決める。」
- ☆「同じ姓(last name)の相手と結婚すれば、子供はすべて同じ性(sex)となる。」

2) 子供の数の予測と多産への願い

- 子供の数を予測する方法には、次のようなことが伝えられる。
- ☆「結婚前日に、花嫁が後ろ向きで上れる階段の数によって子供の数が決まる。」
- ☆「結婚式への途中で、花嫁の車の上を鳥の群れが飛ばば多くの子供に恵まれる。そのとき、もし鳥の数を数えることができれば、その数が恵まれる子供の数となる。」¹⁵⁾

- ☆「結婚式の日に、花嫁が食べるオレンジの種子の数によって予測される。」
- ☆「新婚夫妻が結婚の贈り物の包みをはぐとき、解けたリボンの数によって判る。」
- ☆「新婚夫妻が、結婚の贈り物として受け取った時計の数によって判る。」
- ☆「結婚の夜、花嫁が数える星の数によって判る。」
- ☆「結婚の夜、花嫁が外に投げた一切れのウェディング・ケーキを、朝になってそれをつついた鳥の数によって推測できる。」¹⁶⁾
新婚夫妻が、限産、あるいは多産に恵まれるようにと願うこともある。
- ☆「子供の数を希望どおりにするには、花嫁は老女に、ほしいと思う子供の数だけ糸に結び目を作ってもらう。次に結婚衣装についている3本のピンの周りにその糸を巻きつけるとよい。」¹⁷⁾特に、これは子供の数を制限したい場合である。
- ☆「結婚の日に卵をたくさん食すれば、たくさんの子供に恵まれる。」
- ☆「花嫁が、結婚の日にフルーツケーキを食べると多くの子供が生まれる。」
- ☆「乳を分泌している女性が新床を整えれば、新婚夫妻の多産が保証される。」
- ☆「花嫁花婿の母親たちがともに新床の準備をすれば、たくさんの子孫に恵まれる。」
- ☆「主婦（新婦）が暖炉の火を掻いたとき、火花が彼女のエプロンの上の方に落ちれば、彼女は子供を複数生むであろう。またこのとき、火花はエプロンの膝の上の方まで燃えねばならない」とかつては言われた。因みに、古くから、新婦が火掻き（棒）、火ばさみ、戸口の鍵を渡されると、家事を仕切る役、つまり主婦の座が認められたことを示すと言われた。¹⁸⁾

3) 子供への願い事

生まれてくる子供に対しては、期待する事柄や願い事等がある場合もある。

- ☆「結婚式で歌えば、よい声の子供が生まれる。」
- ☆「口の小さな子供がほしければ、披露宴で小さな片のパンやバターを食するとよい。」
- ☆「初夜のベッドの下にパンを三切れ置いておけば、子供たちは丈夫な歯をもつ。」
- ☆「花嫁が無言のまま新居に運び込まれたら、もの静かな子供たちが生まれる。」
- ☆「カールした髪の子がほしければ、ウェディング・ドレスを着ている間に子羊の毛でできた布に座るとよい。」

4) 妊娠を早めるか遅めるか

- ☆「早く妊娠するためには、枕の下にヒースまたは赤ん坊の写真を敷いて眠るとよい。あるいは、初夜の寝床に木の枝を入れておくとよい。」¹⁹⁾
- ☆「妊娠を遅らせるには、結婚式への途中で煙突の数を数えるとよい。その数は母になるまでの年数を表す。」
- ☆「妊娠を遅らせるには、結婚式の最中に、花嫁は左手の一本の指を、避妊したい年数分だけの回数、ベルトの下に差し込むとよい。」

- ☆「妊娠を遅らせるには、挙式中に司祭が読む聖書のページ数を数えればよい。それによって何年避妊できるかが判る。」
- ☆「妊娠を遅らせるには、夫のズボンからバックルをもぎとり、自分のナイトガウンに縫いつけるとよい。」
- ☆「妊娠を遅らせるには、結婚の夜、花婿のシャツを花嫁の腹部に巻きつけるとよい。」
- ☆「新床の下に経帷子を縫う針を置くと、妊娠を遅らせることができる。」

3 夫婦間での主導権

結婚後の生活については、今も変わらぬ肝要な事柄がある。それは、結婚生活において夫婦のどちらが主導権を得るかという点である。この主導権獲得の方策には多様なものが伝えられている。

- ☆「祭壇で夫婦がひざまずき、その後立ち上がるときに花嫁が花婿の上着を踏めば、結婚後は花嫁が支配権をもつことになる。逆に、花婿が花嫁のドレスやそのすそを踏めば、結婚後は花婿が家庭を仕切ることになる。」²⁰⁾
- ☆「祭壇の前でひざまずいた後、先に立ち上がる者が、結婚後毎朝先に起き上がらねばならなくなる。」毎朝先に起き上がる者が、一日の準備に取り掛かる下働き役となる。
- ☆「花嫁が長いヴェールを着けている場合、彼女の介添役あるいは母親がそれを花婿の足の上にこっそり垂らせておくと、花嫁は結婚後の支配権を得る。」²¹⁾ これに対して、花婿の介添役は花婿を守らんとし、これを払いのけようとする。時には式の間じゅうヴェールを載せたり払ったりの行為が繰り返し続くこともある、と言われる。
- ☆「誓いの言葉の段階で夫妻が立っているとき、相手の足を踏みつけた方が結婚生活の主導権を得る。」
- ☆「花婿が花嫁に指輪をはめようとするとき、花嫁が指を曲げていたりするため花婿がそれに苦勞すれば、花嫁は家庭を仕切ることになる。しかし一方、花婿が楽に指輪をはめることができれば、花婿が家庭を仕切ることになる。」²²⁾
- ☆「結婚式の後で、夫婦のうちで最初の買い物をする者が家庭の金銭の支配者となる。」この理由で、時によると花嫁はこれを確実なものとするため、教会の玄関を出るやいなや付添人から象徴的にピンを買ったりすることがある、とされる。特に Wales では挙式後の帰り道で、花嫁が付添人からピンか何かを買う行為により、夫よりも先に買い物をすることで主導権を獲り、一生夫を尻に敷くことができる、と言われる。²³⁾
- ☆「花嫁花婿のうちで、着ている結婚衣装がより長く傷んだり型くずれしたりしない者が、その家庭の支配者となる。」
- ☆「結婚式の夜、夫婦が衣服を脱ぐとき、自分の衣服を相手の衣服の最上部に置ける者がその結婚の支配者となる。」
- ☆「結婚の夜、床に就く直前に夫婦が互いのズボンを試着し、どちらのズボン姿が似合ってい

るかで、この家庭を仕切る者が判明する。』

☆「初夜に先に寝入るほうが、主導権を得る。』

☆「結婚式の翌日の朝、先に目覚める者がその家の支配者となる。』

さらにここでも、夫婦間の主導権について、家の敷居や戸口に関する伝承が見られる。

☆「新婚生活を始めるとき、夫は花嫁よりも先に家の敷居を跨がねばならない。さもないと一生彼女の言いなりになるであろう。』この俗信は、特に Yorkshire で言われる。²⁴⁾

☆「新婚夫妻が新居に入るとき、戸口に先に左足を載せた方が采配を振るであろう」とされる。これは Somersetshire の俗信である。²⁵⁾

4 結婚記念日

結婚後、苦楽を経てたどり着く節目が結婚記念日(祝婚式日)である。一般にこの記念日には、夫妻が親族や友人を招いて祝いの会をしたり、家族での祝いの食事をしたり、さまざまな過ごし方をする。

結婚記念日には年数に応じてそれぞれの名称がある。これについては、その記念日にふさわしい贈り物が何であるかを示すように、その名称が与えられている。以下に主要な結婚記念日の年数と名称(2種類,,、ただし大半は同一名称)を並列かつ対照的に示す。

<結婚記念日> ²⁶⁾	<Brewerの示す結婚記念日> ²⁷⁾
1 the paper wedding 紙婚式	1 cotton wedding 木綿婚式
2 the straw wedding 藁婚式	2 _____
3 the candy wedding 糖菓婚式	3 _____
4 the leather wedding 革婚式	5 _____
5 the wooden wedding 木婚式	7 woollen wedding 羊毛婚式
7 the floral wedding 花婚式	10 _____
10 the tin wedding 錫婚式	12 silk and fine linen wedding 絹・亜麻婚式
12 the linen wedding 亜麻婚式	15 _____
15 the crystal wedding 水晶婚式	20 _____
20 the china wedding 陶婚式	25 _____
25 the silver wedding 銀婚式	30 _____
30 the pearl wedding 真珠婚式	35 _____
35 the coral wedding 珊瑚婚式	40 _____
40 the emerald wedding 緑玉婚式	45 _____
45 the ruby wedding 紅玉婚式	50 _____
50 the gold(en) wedding 金婚式	75 _____
60 the diamond wedding ダイヤモンド婚式	

[備考: _____ は左欄と同一名称であることを示す。]

このうち60周年記念は、75周年記念に代わって the diamond wedding (ダイヤモンド婚式) とみなされることが多いが、それはヴィクトリア女王の即位60周年記念が Diamond Jubilee (ダイヤモンド記念式) と呼ばれたことに因む、と *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable* では補足がなされている。²⁸⁾

結婚記念日は毎年巡ってくるものであるが、その中でも25周年の the silver wedding (銀婚式) と50周年の the gold(en) wedding (金婚式) が最も大きな節目となる記念日とされ、一般に他の結婚記念日より盛大に祝われるようである。

ま と め

最近のことであるが、ある教会での結婚式で、司祭が花嫁花婿に結婚の3つの意義について諭すのを聴いた。それは、愛を育むこと、新たな生命を創造すること、人格を高め合うこと、の3つであった。結婚は、人にとって今も昔も変わらぬ人生の重大事である。結婚する以上は、幸せを願って夫妻が力を合わせて精一杯努力しなければならない。

今号では、花嫁の敷居越えに始まり結婚記念日に至るまでの諸習慣とそれに纏わる俗信を考察した。結婚という生活文化において英米人の築いてきたそれぞれの習慣と俗信については、その考察過程でしばしば自国のそれらと対比せざるを得ない。当然ながら、そこには類似形態もあれば、また場合によっては全くの異質形態もある。しかしながら、特に後者の異質形態への理解と認識を深めることこそ、この研究の目指すところと確信する次第である。そこには英米人の心の奥に流れる「力強く、かつ美しい輝きのあるもの」が見えるように思われるのである。

[今号でもって「英米人の迷信・俗信」考のうち、Ⅲ「恋と結婚」の章を終了する。]

Acknowledgements :

多くの貴重なご教示をいただいた Amy Chavez 女史 (元、中国短大講師) に、心より感謝申し上げます。

Notes:

- 1) "Bride," *Zolar's Encyclopaedia of Omens, Signs & Superstitions*, ed. Zolar (London: Simon & Schuster, 1989) 53.
- 2) Sir Walter Scott, *Guy Mannering* (Edinburgh: Adam & Charles Black, 1871) 433, Note F.
- 3) "Wedding," *Cassell Dictionary of Superstition*, ed. David Pickering (London: Cassell, 1995) 282(L)-(R).
- 4) "England & Wales," [You are cordially invited to] *Weddings, Dating & Love Customs of Cultures Worldwide, Including Royalty*, Carolyn Mordecai (USA: Thompson-Shore, 1999).
Marriage by capture was regal in England before the Thirteen Century.
- 5) Reader's Digest Assn ed., *Folklore, Myths and Legends of Britain*, 2nd ed. (London: Reader's Digest Assn, 1997) 59(R).
- 6) Tad Tuleja, *Curious Customs* (New York: Harmony Books, 1987) 69.

The chivalrous interpretation, which sees the husband helping his beloved over a tricky obstacle, is a subtle variation of this capture scenario.

- 7) Tuleja, 69-70.
- 8) William Shakespeare, *King Henry VI, Part III*, 4-7, 11-12, The Arden Edition of the Works of William Shakespeare, ed. Andrew S. Cairncross (1964; London: Routledge, 1992).

For many men that stumbles at the threshold/ Are well foretold that danger lurks within.

- 9) T. F. Thiselton Dyer, *Folklore of Shakespeare* (1883; Williamstown, MA: Corner House, 1983) 358.
- 10) Shakespeare, *Coriolanus*, 4-5, 115-19, The Arden Edition, ed. Philip Brockbank (1976; London: Routledge, 1996).
- 11) Leslie Jones, *Happy Is the Bride the Sun Shines On, Wedding Beliefs, Customs, and Traditions* (Illinois: Contemporary Books, 1995) 64.
- 12) Jones, 145.
- 13) Jones, 68.
- 14) Jones, 148.
- 15) Jones, 149.
- 16) Jones, 150.
- 17) Jones, 155.
- 18) 成田成寿編『英語歳時記 [雑]』(1986; 東京: 研究社, 1986) 417.
- 19) Jones, 151.

For quick conception, sleep with heather or pictures of babies under your pillow, or put a tree branch in the bridal bed.

- 20) Jones, 104.
- 21) Jones, 104.
- 22) Jones, 105.
- 23) "Marriage: dominant partner," *A Dictionary of Superstitions*, ed. Iona Opie & Moira Tatem (1989; Oxford: Oxford UP., 1990) 238.
- 24) "Marriage: dominant partner," Opie & Tatem, 238.
- 25) "Marriage: dominant partner," Opie & Tatem, 238.
- 26) "Wedding anniversaries," 『英米故事伝説辞典』井上義昌編(1972; 東京: 富士房, 1991).
- 27) "Wedding anniversaries," *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*, rev. Ivor H. Evans, Centenary ed. 6th imp. (1870, ed. Ebenezer Cobham Brewer; London: Cassell, 1978).
- 28) "Wedding anniversaries," Evans.

Speculation Concerning Superstitions in the Cultural Background of the English & The Americans — (11)

III LOVE AND MARRIAGE

Part 6: On the Customs and Superstitions of A Bride's Being Carried over the Threshold, Newlyweds' Happy Life, Their Being Blessed with Children, the Initiative between A Married Couple, and Wedding Anniversaries

Kunihiro FUJITAKA

College of Liberal Arts and Science for International Studies

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 2002)

When newlyweds enter their house for the first time, it is customary that the bride should be carried over the threshold by her husband. Why has this custom been cherished by them for many centuries? What kind of reasons can we find out in this long-lived custom?

It is very important that newlyweds will be blessed with children. They try to put a variety of methods into practice, so as to be blessed with a lot of babies in their married life. What sort of methods have they used so far in reality?

In their daily life, there usually happens a matter of the initiative between the husband and wife. When we look over the conflict between them, we may come to the knowledge that there have been various ways in which they can get the initiative.

Newlyweds will meet the first wedding anniversary in a year of their wedding. Wedding anniversaries in general have special names that show us the items of gifts, mostly jewels, that the husband should give to his wife. Among many wedding anniversaries, they usually celebrate the 25th anniversary, called silver wedding anniversary, and the 50th one, gold(en) wedding one, on a larger scale than others.

In this paper, we will speculate on the customs and superstitions concerned with a bride's being carried over the threshold, newlyweds' happy life, their being blessed with children, the initiative between them, and wedding anniversaries. During this speculation, we would also like to exemplify some practical usages from English literary works.